

SHOW HEYシネマルーム

★★★

リーグ・オブ・レジェンド ～時空を超えた戦い～

配給/20世紀フォックス映画

2003 (平成15) 年9月9日鑑賞

<東宝試写室>

Data

監督: スティーブン・ノリントン
出演: ショーン・コネリー/ナサー
ラディン・シャー/ペータ・
ウィルソン/トニー・カラン
/スチュアート・タウンゼン
ト/シェーン・ウエスト/ジ
エイソン・フレミング/リチ
ヤード・ロクスバーク

👁️👁️ みどころ

有名な冒険小説『ソロモン王の洞窟』や『海底二万里』の主人公やトム・ソ
ーヤー、透明人間など7名が結集し、世界大戦の勃発を狙うMことファントム
と対決する。向かうはベニス。ヨーロッパ列強による極秘の和平会議阻止を狙
うファントムをたたくため、潜水艦ノーチラス号に乗って……。夢のような
荒唐無稽(?)なストーリーもまた楽しいもの……?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<冒険小説の主人公たちの『時空を超えた』大集合>

7人の主人公といえど何といっても黒澤明監督の『七人の侍』と、これを西部劇にアレ
ンジした『荒野の七人』が有名。この『リーグ・オブ・レジェンド』の原タイトルは『T
HE LEAGUE OF EXTRAORDINARY GENTLEMEN』。つまり
特別な(特殊能力を持った)紳士たちがリーグを組んで悪と戦うという架空のアドベンチ
ャー映画だ。

摩訶不思議な登場人物で構成されたチームの戦いを見ると、日本名のサブタイトル『時
空を超えた戦い』がいかにもピッタリ。こういう映画はあまり深く考えても意味がない。
とにかく無邪気な少年時代の気持ちに戻って楽しむことが大切だ。

<登場人物のご紹介>

その特殊能力を持った「七人の侍」には、日本人に馴染みの薄い者も多いと思うので、
ここで紹介すれば次の通りだ。

①まずはH. R. ハガードの秘境冒険小説『ソロモン王の洞窟』のアラン・クォーターメ
イン。これに扮するのが元祖007のジェームス・ボンドのショーン・コネリーで、彼が

七人の集団のボスとなる。

②「七人の侍」を乗せる潜水艦ノーチラス号の艦長は、ジュール・ヴェルヌの海洋科学小説『海底二万里』のネモ船長。

③唯一の女性は、ブラム・ストーカーの恐怖小説『吸血鬼ドラキュラ』のヒロインのミナ・ハーカー。

④H・G・ウェルズの怪奇科学小説『透明人間』のロドニー・スキナー。

⑤マーク・トウェインの不滅の冒険小説『トム・ソーヤーの冒険』のトム・ソーヤー。

⑥オスカー・ワイルドの怪奇幻想小説『ドリアン・グレイの肖像』のドリアン・グレイ。

⑦R・L・スティーブンソンの怪奇小説『ジキル博士とハイド氏』のジキル。

西欧諸国では、みんな若い時にこれらの小説を読んでいるのかもしれない。しかし、我々の世代なら日本人でも少年ワクワクしながらこれらの本を読んでいるだろうが、今の若い人たちはほとんど読んでおらず、主人公の名前すら知らないのではないだろうか。せいぜい知っているのはトム・ソーヤー少年とジキル博士くらいか・・・？

<ジキルとハイドは『ハルク』を彷彿>

R・L・スティーブンソンの小説『ジキル博士とハイド氏』は、すべての人間が持っている「二面性」を暴いた衝撃作で、まさに人間性の本質に迫る小説。しかしこの映画での「ジキル&ハイド」は全く別。ジキル博士は、ある血清を飲めば身体を巨大化させ、野獣の攻撃性をもった怪物に変身！その怪物の名がハイド。この巨大化したハイドは、今日本で公開中の映画『ハルク』と全く同じような「怪物」だ。身体が大きくなったり、小さくなったりする過程もだいたい同じ。これと対抗するため、敵方のファントムも、ジキル博士が作った「変身させるための血清」を飲み、より巨大化した怪物となってハイドと戦うシーンもあるが、ここまでくるとちょっと漫画的・・・？

<オールスター映画は難しい>

ジョージ・クルーニー、ブラッド・ピット、マット・デイモン、ジュリア・ロバーツ等のオールスターが登場した映画『オーシャンズ11』（2001年）は前評判が高く、並んで映画館に入るほどだったが、中身はかなり薄っぺらだった。それは、オールスターの登場となると、必然的に一人一人の描き方のウェイトが薄くなり、どうしても総花的なストーリーになってしまうからだ。それと同じ意味で、この「七人の侍」の冒険も、それぞれの特殊能力を示しながら悪と戦っていくシーンを連続させていだけで時間がいっぱいになってしまう。まあ、それはそれで楽しいものの、言ってみれば、それだけのこと。

悪を滅ぼしたものの、最後のファントムとの戦いの中でリーダーであるショーン・コネリー扮するアラン・クォーターメインが死んでしまい、悲しい結末となる。しかし、みんながアランの死を悼んで立ち去った後、そのお墓がグラグラと揺れ動き、アランの「復活

を予感させるのはご愛敬・・・？

しかしまあ、このような素晴らしく楽しい企画・脚本を作ったチームには大拍手・・・。

2003（平成15）年9月11日記